

海洋教育者を対象とした海洋リテラシーに関する調査研究

○千足 耕一， 佐々木 剛（東京海洋大学）

キーワード: 海洋リテラシー、Ocean Literacy、質問紙調査

研究の目的

アメリカにおける Ocean Literacy (海洋リテラシー) とは「海の人への影響と、人の海への影響についての理解」であり、海洋リテラシーを持つ人とは、海の機能についての本質的な原理と基本的な概念を理解し、意味ある方法で海についての知識を伝えることができ、海とその資源について知識と責任ある決定をなすことができる、と述べられている。海洋リテラシーとは、海洋に関する知識・教養を得て、それを活用する能力を指す。また、海が私たちに与える影響を理解し、私たちが海に与える影響を理解することであると述べられている。

本研究の目的は、日本における海洋リテラシーを構成する要素について検討するとともに、アメリカで作成された海洋リテラシー基本原則の取り扱いについて検討することである。そのために、本研究では2つの課題を設定した。

課題①: 海洋リテラシーを構成する具体的な指標(言葉・語句)を収集する。

課題②: アメリカにおける全米海洋教育者会議において作成された「Ocean Literacy -The Essential Principles of Ocean Sciences-」の日本語訳をもとに独自に加えた18項目を含む75項目から構成される修正版海洋リテラシー基本原則の取り扱いについて検討する。

研究の方法

調査①は自由記述形式で行った。また、調査②では各項目についての取り扱いや可能性について選択式で回答を求めた。調査対象者は、水産高校教職員・海洋教育の事業に携わる指導者等の海洋教育における有識者130名であり、調査書を直接郵送したのち返信があった52名(40.0%)のデータを分析に用いた。また、水産高校の教諭及び助手29名を対象に集合法により同様の調査を実施した。課題②では、この計81名を対象に分析を行った。加えて調査①では海辺の体験

活動推進協議会への参加者の内、回答があった23名を加えた計104名より得られたデータを分析した。

結果

課題①の質問紙調査においては、427個の語句が収集された。これらは、「海の恩恵」「母なる海」「未知の領域」「融和の場」「冒険の舞台」等に代表される“海の価値”に関する項目、「船員文化」「魚食文化」「スポーツ文化」などの“文化”に関する項目、「歴史学」「民俗学」「考古学」「文学」「水産学」「生態学」などの“学問”に関する項目、「漁業」「海運業」「観光業」に代表される“産業”に関する項目、「気象」「風と波」「潮汐」「水の循環」「生態系」「海洋生物」に代表される“海に関する知識”についての項目、「エネルギー」や「水産」の“資源”に関する項目、「環境保全」に関する項目、「海水温の上昇」「海洋汚染問題」等の“環境問題”に関する項目、「航海技術」「救助方法」などの“海での技術”に関する項目、「危険の認識」「自己責任」などの“安全”に関する項目、「くつろぎ」「やすらぎ」などの“心身への影響”に関する項目、「気象を判断できる」「海の変化に対応できる」などの“能力”に関する項目、「海への恐れ」「共生」などの“態度”に関する項目、「海への興味と関心」に関する項目、「マリンスポーツ」や「ビーチクリーンアップ」などの“活動”に関する項目、「乗船体験」などの“体験”に関する項目の16のカテゴリーに分類された。

課題②においては海洋リテラシー基本原則の各項目について、これまで授業や事業の中で扱ったことは、それほど多くないことが示された。また、授業や事業で取り扱うことは可能と考えられている項目は多かったものの、実習の中での取り扱い可能性についての回答率は高くなかった。

謝辞

本研究は科研費(21500554)基盤(C)一般の助成を受けたものである。

